

臨時増刊号 No3

みなさまへ元気を!!

中之島こころ塾

[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

「特集」コロナ禍にうち勝とう!!

「塾生の 塾生による 塾生のための塾」

松本 学

多くの皆さんとは令和二年二月八日の横田南嶺老師のご講義以来となります。大変ご無沙汰となりますが、安全で変わらずお元気でお過ごしなさっていることを心より祈念しております。家族のような塾生の皆さんと毎月お会いできることが当たり前のことではなく、本当に有難いことなんだと今更ながら気付かされました。

様々な活動が制約を受け不自由な生活を余儀なくされる中、また、自然災害が繰り返される中、私たちが体験している悲しみや苦しみは、今、同じように苦しむ人々の痛みを共感し、寄り添うために与えられたものではないかと感じています。最近手にした横田南嶺老師と塩沼亮潤大阿闍梨の対談本『今ここをどう生きるか』を拝読して、「真の心」と書いて「慎」、それに気付く」というくだりに目がとまりました。どんなことがあってもあきらめず努力すること、そして何よりもまごころを常に忘れない自分でありたいと思います。

私たち一人ひとりが今回の禍の啓示から気付きを得て、この苦難を乗り越えた暁にはきっと新しい未来が待っていると確信しています。森信三先生をはじめとする先哲がそうであったように、それぞれの持ち場で日常の徳行に努めると共に、常に学び続ける素直さ、謙虚さが大切だと痛感します。日本の、いや世界の未来を切り拓く道友が、再び中之島の学び舎に足を運び、共に切磋琢磨できる日を心待ちにしています。

合掌

塾生の皆様!お久しぶりです。

暑い季節、如何お過ごしでしょうか?

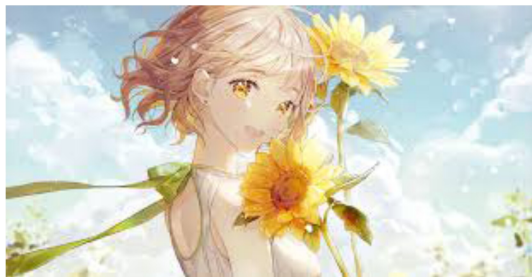
山路直美

二月以降、皆様にお会いする機会がパタリと途絶え、第二土曜日を寂しい思いで現在まで過ごしております山路です。

人間学塾の皆様は、コロナ禍の中であつてもきつと前向きに、日々を過ごされておられると確信しています。再会ができた際には是非皆様とこの数ヶ月のことや近況報告を語り合いたいと思います。そして、現在、その9月の再会に向けて、世話人一同で「何ができるのだろう」「万全な対策を」「アフターコロナの塾のあり方」を一心に検討中です。塾生の皆様からも知恵をお借りしながら、誰もが安心して受講できる環境や方法を考えていきたいと思っています。お近くの世話人、またはお電話でフォローさせて頂いた世話人へのご意見等お気兼ねなくご意見をお寄せ下さい!

最後に、私にとつて人間学塾は多くの皆さんと出会え、人生を変える良きご縁を頂いた大切な場所です。これからも変わらぬ気持ちで第9期以降も参加させて頂きます。再会を心より楽しみにしております!

熱中症に気を付けてね!!
LOVE YOU はおにぎり!!



《大悟徹底》

寺田一清先生寄稿録

「男は眼力と肚」



昨年の三・一一の大災害に引き続き、政治・経済・外交面でもいよいよ決断を要し、迫られる時代の趨勢が予想されます。このたびの表題は、森先生からよくお聴きした一語の迫力です。そしていま一つ加えるとすれば、耐忍という一語です。この眼力と肚と耐忍という三つが、森先生の生涯を象徴するコトバのようです。

そのいづれにも劣るわたくしなるが故に、いよいよ年頭に当たり、禪の締め直しを、すわわち、決心と覚悟を新たにする必要を痛感してやみません。

その具体的なるもの第一は、いよいよ自ら立腰に精進することです。自らに課すると共に、十代二十代の将来を託する方とのご縁を大切に、その切磋琢磨を期することです。幸いにも、月に七、八カ所の読書会に参加しておりますので、とりわけ若年層の男性との結縁を大事にしたいと思っています。お陰で、未来を託するに足るとおぼしき人材が必ずや毎回一人から二人と見出し得る喜びは格別です。おのづからわたくし自身も血湧き肉躍る、欣喜雀躍を禁じ得なく、早速住所をお聞きし、即一筆啓上となります。とりわけこの交友交流「いのちの呼応」が、わたくしに課せられた第二の決心覚悟です。

そして第三は、自己の体力増強です。それが為には、より歩行を強化し、脚力をつけることです。幸いにも毎年の目標として「不二登拝」という指標が与えられていますので、意識して、脚力増進へ日々鍛錬し「行動俊敏」に努力したいと思っております。

天分塾ニュース163号寄

「人生の宝物」

西中 務先生



■ 無数の方々の恩恵のうえに 私たちの法律事務所のあるビルの1階に、約40坪のエートス・ステーションという会場があります。ここは、さまざまなセミナーや絵画の個展、ヨガ教室など、多くの方にあらゆることで使っていただいています。去年の七月から貸しだしを始め十か月、のべ5千人の方にご利用いただけてまいりました。皆さんに驚かれるのですが、その使用料は無料です。この一等地にある会場をなぜ無料でお使いいただいているのか？それは人様のお役立ちをさせていただきたい、ただその思いによるものからです。

私たちが今ここに存在しているのは、実に多くの人のお陰によるものです。まずは自然の恵みでしょう。仮に千円の食事をいただいたとしても、これは単に千円分の恵みではありません。ご飯となる米が成長するまでの間の太陽や水の力が必ずあります。

また、乗り物にしても、一万円ほどで新幹線にも乗れますが、新幹線の建設に携わった方々がいらっしやる。東京から博多までの新幹線の建設工事において、417名の方々が亡くなっておられるのです。そんな人たちのお蔭があつてこそ私たちは快適に新幹線を利用できているのであり、けつして千円を払っているから食事できて当たり前、一万円払ったのだから新幹線が使えて当たり前ではないのです。

■ 「恩返しと下坐行」

今から40年以上前、母校の北野高校で、先輩となる森繁久弥さんの講演会がありました。当時は生徒たちの自殺が多く、大きな問題となっていました。講演会は「二百万人の人に御礼」というテーマで、森繁さんは生徒たちに「皆さんは十五歳。今までどれほどの人のお陰で諸君があるのか」と問いかけら

れました。そして「二百万人の人のお蔭で、現在ここにいます」と。十五歳となるまでに、あらゆるお世話いただいた方々から受けた恩恵は二百万人にもなるということです。

それならば、七十歳を超えた私があるためには、もはや数にできない、無数の方々からの恩恵を受けているということでしょう。私があるために、私の作ったものなど何ひとつもない。全部人様のお蔭であり、世間のお蔭、親のお蔭です。就職や結婚の世話をしてもらったとなれば、恩返しはしやすい。しかし、太陽など自然の恵みや、あるいは見知らぬ多くの人のお蔭となると、恩返しの方法がない。この非常に大きな恩、これは道徳的な負債とも言える変えられないでしょう。たとえば、世間では身内の者を早く入院させたいがためにツテを使ったりということもありましようが、私はこういうことは一切いたしません。順番を狂わせてまで、自分の都合を通すのは道徳的な過失だと思ふからです。罪には二つあり、刑法的な犯罪は「犯罪」、そして道徳的な過失は「罪」です。道徳的な過失をおかしたのなら、償わなければなりません。

受けてきたご恩のお返しからエートス・ステーションの館長をしております。皆様に使っていただくにあたり、見返りは求めない、お礼や感謝の要求はしないと決め、ただ、使っていただきたいという思いだけでやっています。

皆様に気持ちよく利用いただくため、私は毎朝6時に事務所に出向き、エートス・ステーションの掃除や整備などをします。森信三先生も、全ての物事には基礎や土台が必要とおっしゃられ、そして我々人間の土台とは「下坐行」だとおっしゃっておられます。

■ 善を積む生き方

「積善の家には必ず余慶有り。積不善の家には必ず余殃（よおう）有り」善を積む家には必ず喜びがあり、そして「積悪」ではなく、「積不善」つまり

善いことを積まないことへの戒めの言葉があります。鍵山秀三郎先生は「人間は大なり小なり心の傷を持っている。その傷を癒してくれるのは、人間の温もり以外にはない。私はその実践として掃除をしているのです。できるだけ人を喜ばせることを心がけています」と仰っています。

善い話を聴くだけでなく、善いことを積んでいるとはいえない。だからこそ、人に喜びを与え、人の役に立つことを実際に、行っていきたいと思ひます。人に喜びを与えること、人を喜ばせる行動は、気をつければたくさんあります。例えば、皆の使うトイレでの洗面台や小便器での汚れを紙で拭いたり、人の履物を揃えたり、また廊下の小さなゴミなどを拾うなどは、常に心がけるようにしています。そして殊に、人間の實力は、ハガキを何枚出すかに表れると思います。人の不幸は友達をいかに持っているからです。

致知出版の藤尾社長が一流の人の4条件として、①情熱がある。②会った人を味方にする。③苦勞を顔に出さない。④親祖先を敬う。と仰っていました。特に②会った人を味方にするためには、ハガキです。

私は今日会った人には明日ハガキが届くよう出すようにしています。たった一枚のハガキ、たった一言の言葉が、人に喜びを与え、人を励ましたり慰めたりする。これほど意義あることはなかなかないのではないのでしょうか。ハガキを書くということは、まさにいのちの呼応と言えましよう。

(抄録 中川千都子)



距離をとりましよう



マスクを着用しましよう



手を洗いましよう